

< 産地レポート >

宮崎県におけるロング肥料とLP肥料を用いた「ピーマンの植穴施肥」技術について

宮崎県経済連 営農振興課 技術主管 横山 明 敏

JAはまゆの「促成ピーマン」において、年明け後の収穫や整枝作業との競合で追肥が遅れ、草勢低下によって反収が伸びない状況がありました。そこで追肥遅れを回避することを目的に平成23年から植穴施肥の取り組みが始まりました。植穴施肥とは、植付け部分の下に施肥を行う局所施肥の1つです。

はじめはロング肥料だけで植穴施肥の検討を行っていましたが、コスト低減と追肥効果を高める目的で、翌年からはロング肥料とLP肥料を併用した取組みを始めました。平成25年には、施肥技術がおおむね確立したことで①ロング413（270タイプ）の単用と②ロング413（270タイプ）とLPS（160タイプ）を併用した2つのタイプが日南管内で広く普及し、安定生産につながっています。

また植穴施肥を行ったことで、うどんこ病の発生が少なくなったり根に近い土壌中のリン酸や加里が減少するなどの副次的な効果もみられています。

その後、平成26年にはJA尾鈴の促成ピーマンで普及し、平成27年にはJAえびの市の夏秋ピーマンとJA西都の促成ピーマンで、平成28年からは宮崎中央管内でも試験栽培が始まるなど、徐々に広がりを見せています。

平成28年には、ロング肥料とLP肥料を2回施用する手間を省くため、両者を混合した「ピーマン植穴一発くん」が販売され、技術が普及するための体制も整いつつあります。

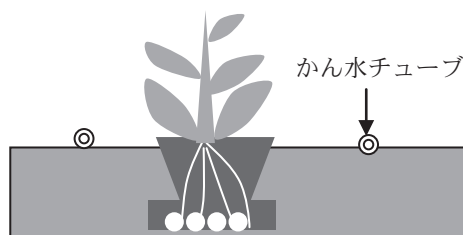


図1. 植穴施肥の様子

1. 植穴施肥の基本的な技術

- 1) 基肥は、基準通りに施用します。
- 2) 10a当たりの植付け本数と窒素追肥量から1株当たりの植穴施肥量を決めます。
- 3) 追肥の一定量を植穴肥料として用い、養分吸収のピーク時に肥料不足が予想される場合の追肥分として残しておきます。
- 4) 植穴施肥を行う場合は、草勢観察と共に汁液診断などで栄養状態を確認しておきます。
- 5) 植穴に施用した肥料は、窒素の溶出がスムーズにいくように土壌とよく混ぜておきます。
- 6) 植穴施肥に用いる肥料のタイプは、作型や栽培期間などにより異なります。
- 7) 植穴施肥を行う圃場は、地力（窒素肥沃度）が高い方がよい。

2. 植穴施肥の方法

- 1) ピーマンを10アール当たり1000株定植、窒素追肥量25kgと仮定して、このうち何kgを植穴に施肥するかを決めます。例えば、窒素追肥量のうち18kgを植穴に施し7kgは窒素不足時の液肥分として残します。植穴にはロング肥料とLPS肥料を同じ量を施すとすると $18\text{kg} \div 1000\text{株} = \text{窒素} 18\text{g/株}$ となります。ロング肥料の窒素の保証値は14%、LPS肥料の窒素の保証値は41%ですので、一対一に混合したとすると混合物の窒素は27.5%になります。 $18\text{g} \div (27.5 \div 100) = 65.45\text{g}$ の2分の1の32.7gをそれぞれ植穴に施用することになります。
- 2) 肥料の計量は、ペットボトルなどを使って計量用の容器を作っておくと便利です。
- 3) 肥料は、植穴内で土壌とよく混ぜておきます。
- 4) 植穴施肥を行った株元に水が十分かかるように畦はかまぼこ型の形状にならないようにします。水が株元にかかると窒素の溶出が遅れる原因となるので、かん水チューブの配置など注意が必要です。